

Safe Communityは、日本の安全文化に何をもたらしたのか ～SCの社会実装10年の「気付き」覚書き その2～

石 附 弘

日本セーフティプロモーション学会理事

Awareness of Society Implementation of SC during past 10 years -Part 2-

Hiroshi Ishizuki

Director of Japanese Society of Safety Promotion

前号では、SC10年の自問自答6問の内、第1の『問1 SCは、日本の地域安全文化に何をもたらしたのか？（以下、①～⑤）』の内、①②について述べた。

- ① WHO等国際機関が提唱する『健康（Health）・安全（Safety）・地域（Communities）』の世界戦略的・統合的取組み』の存在とその国際的普遍的価値に対する気付きや学び
- ② 予防安全の考え方・手法に対する気付きや学び（以上、前号）
- ③ 科学的根拠（エビデンス）ある安全対策に対する気付きや学び
- ④ 国際指標（7指標）による「地域の安全の向上」を体系的・組織的・包括的な社会安全システムに対する気付きや学び
- ⑤ コミュニティ主体（オーナーシップ）という考え方・手法に対する気付きや学び（地域の絆の「意味と価値」の再認識、共考、協働の学習と自主的安全創造の意義）

本稿では、問1③「科学的根拠（エビデンス）ある安全対策に対する気付きや学び」について述べることにしたい。

3. SCと科学的根拠（エビデンス）ある安全対策

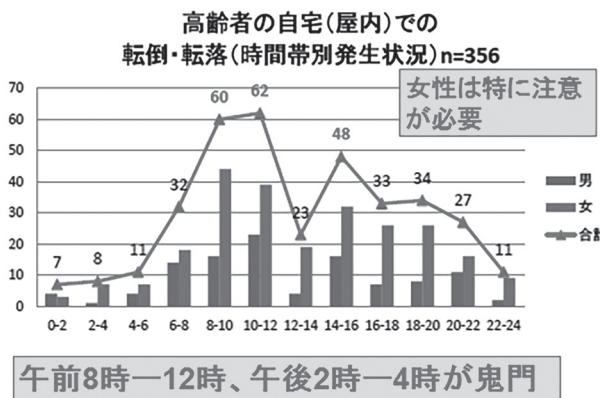
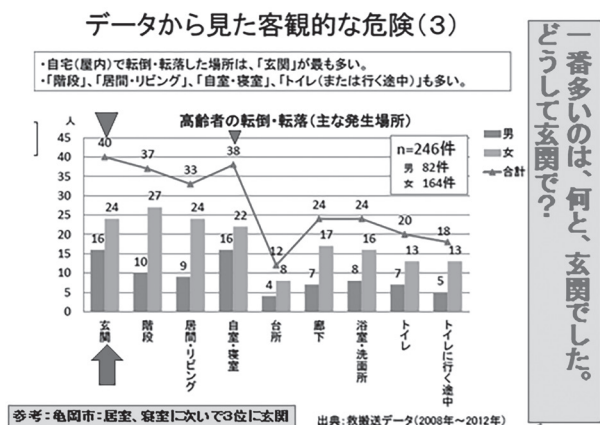
3-1 転倒など生活現場の身近なリスクの実態解明

3-1-1 高齢者の自宅（屋内）の転倒転落事故

内閣府の生活環境調査（2010年）や亀岡市等の調査では、転倒発生場所は「居室」が最多との報告がなされている。しかし、SC認証都市秩父市の調査（2008年～2012年の救急搬送データ）では「玄関」が最多であり、時間帯では、8時～12時、14時～16時の間に、高齢女性の転倒が顕著に多いことが判明した。農村地帯の旧家には昔ながらの立派な家が多く、玄関の敷居（部屋を仕切るために敷く横木）も高く、足を高く上げて跨がなければ越えられないほど段差がある。

なお、秩父市では、1年以内に転倒したことがある高齢者は22%であり、47%の人が、転倒に対する不安感を

もっていることが、SC活動を通じて明らかにされた。（次の2図は、秩父市作成のスライドに、筆者が市民向け講演用に加工したもの）



（注）段差という目で伝統的日本人家屋を見ると、部屋に入るためには、玄関土間、式台、上がりかまち（框）、地板、敷居、居間へと多くの段差を超えなければならない構造になっている。

スウェーデンから来た国際審査員は、「何故、秩父では、玄関で転倒するのか？」と不思議そうに質問をしたが、靴のまま部屋に入れる欧州の家の構造と違うことを知らなければ、疑問に思うのは当然である。湿気が多い日本では高床式の家、部屋と部屋の仕切りなどが合理的であった。しかし超高齢社会になって、人生50年モデル

から人生80年-90年モデルの新時代では、段差が転倒リスクの原因となってしまった。しかも玄関の床板と敷居の色が共に黒やこげ茶で、照明も暗い。若い時は注意力も運動神経もあり平気で跨げた敷居も、高齢になり視力や脚力が落ちてくると、敷居そのものがリスクになる。このように地域特性によって、また、居住者のライフスタイルの違いによって、あるいは年齢によって、リスクの所在や状況が異なってくる。その特徴点を踏まえた科学的根拠ある安全対策は、SCの真骨頂であろう。

皆、経験はしているが、誰もその実態は知らない（暗黙知）リスクの実像が、データで客観化（形式知）し可視化することで、皆が共通の目標をもって、地域全体でリスク管理が可能となる。コミュニティに内在する地域課題について、市民自らが課題解決のために主体的にどう関わっていくのかの実践的プログラムを提示する場合、データ分析に基づき、これを判りやすく地域全体で情報共有することは、SCの普及のための基礎的手順である。

外傷予防という目的は、一人ひとりの安全意識の変革とともに環境改善、また、地域全体で取り組む地域の絆の強化があって初めて可能となる。

また、研究成果の社会実装には、各レベル、対象ごとに、相手が理解できるよう、専門用語の「翻訳作業」が必要なのである。

コラム

筆者が、高齢者の転倒や骨折問題の重要性について、初めて耳にしたのは、2005年9月、スウェーデンの首都ストックホルムにあるカロリンスカ大学のWHO協働センター Karolinska Institutet WHO Collaborating Centre協働センター長のスヴァンストローム博士（SC生みの親：Leif Svanström M.D., Ph.D.Professor）であった。

「東洋人と違って、西洋人は座高が高く転ぶと骨折しやすい。特に大腿骨頸部骨折は、これが原因で寝たきりなど重大な健康障害を及ぼす。人口10万人あたり、何人が転倒骨折しているかは、その「都市の文明

度」をはかる指標になる。安全教育もあるが、それ以上に、街中の段差など転倒しやすい環境改善が重要である」と。

当時の筆者は、恥ずかしながら「転倒骨折」など全く関心がなかった。まして大腿骨頸部骨折といわれてもどこかわからない。何故、「転倒と都市の文明度」が関係するのか？法学部出身の筆者には、チンパンチンパンであったが、しかし、博士のこの言葉は、何故か耳に残り、その後の「SC」の調査研究のバネになった。

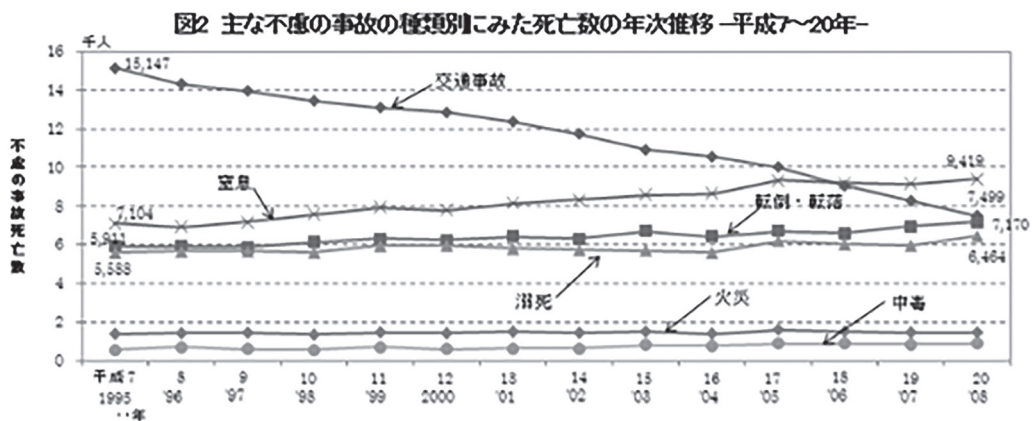
そもそも、筆者が、「SC」という言葉を初めて耳にしたのは、2003年9月、パリの欧州交通大臣会議事務局（ECMT）事務総長 Mr.Jack Shrt氏からであった。「WHOから頼まれて欧州域内の交通死亡事故削減対策のベストプラクティス調査を行ったところ、英国、オランダ、スウェーデンの3か国が特に優れた施策を行っており、そのなかでもスウェーデンの『ビジョンゼロ』と『SC』は、新たな試みとして注目している」とのことであった。

当時、WHOでは、交通事故、暴力、自殺を21世紀の最大課題と位置づけ、これらの課題に対して公衆衛生的アプローチ、特に、科学的根拠に基づく予防安全（被害の未然防止対策、事故防止対策）からの積極的取り組みを行っていたのだが、日本ではほとんど紹介されていなかった。何で、病気や鳥インフルエンザ（感染症）のWHOが、道路安全の調査をするのだろうか。「SC」って何だろうか？

そこで帰国後、「SC」の文献探しや専門家探しを行い、最初に「SC」の手ほどきを受けたのが、当学会副理事長の反町先生であった。

思えば、転倒や骨折問題が「SC」とのお付き合いの始まりであり、もし、あの時、スヴァンストローム博士の一言がなかったら筆者の今はなかった。人生とは面白いものである。

3-1-2 不慮の事故による死因第2位の転倒・転落 因みに、超高齢社会にあって、転倒骨折は、外傷-健



康障害－介護への道への鬼門である。専門家の話では、大腿骨頸部骨折の高齢者の約3人に1人が外出をしなくなり、8人に1人は要介護の状態となっているという。

また、H27の人口動態調査（厚労省）によれば、転倒転落の件数は7992件であり、不慮の事故では窒息に次いで第2位にあり、交通事故より大きくなっている。今やハイリスクの事故として、全国民的な安全対策が求められている。

3-2 データに関心を示す高齢者が、SC導入で誕生

3-2-1 何が問題なのか？ 安全意識と環境改善の狭間

認証NO 2の十和田市で、高齢者の転倒について意識調査を行ったところ、当初、「転倒したのは自分の不注意」が原因という回答が圧倒的に多かったという。

これは、物事が上手くいかなかった場合、日本人の多くが、不幸な結果を招いたのは、自分の注意や努力が不足のためであると考える傾向性（自己原因責任の『思考的文化特質』）の徴表であろう。この文化特質が、日本社会の伝統的秩序観を形成してきたことは特記されてよいが、予防安全という観点からは、本当に正しい考え方のだろうか？

例えば、特定の場所で10人が10人、転倒したとしよう。転んだ人の不注意がないわけではないが、問題の本質は『人』よりは『場所』にある。皆が転ぶ原因を解明し、場所の環境改善が正しい事故予防対策である。誰が歩いても転倒するところは、人に対する安全教育（行動変容）では限界があり、そこに行かないこと、行けないようにすること、行く場合には特別の歩き方など特別の対策が必要である。

3-2-2 データによって、環境安全への気付き

そこで十和田市では、SCの勉強会を通じ、統計により場所等のハイリスク箇所などにつき、歩行環境などへの関心を持つように指導した。

こうして、統計やデータの見方や説明を行う過程で、データや統計に最も縁遠かった「高齢者」が、データに関心を寄せるようになった。これに伴い地域のSC活動への関心も高まっていったという。

このようにSCの地域への安全教育には関係者の涙ぐましい努力が必要があった。

【自己原因責任の『思考特質』の問題点】

① 安全教育の限界

② 被害者に過大の負荷

こうした特質は交通事故、犯罪被害等事件事故の被害者の思考パターンと類似している。特に、犯罪被害の場合にこの傾向は顕著で、例えば、オレオレ詐欺の被害者が、『被害に遭ったのは自分が注意しなかったせいだ』との自責の念にかられ、家族や親戚もこれを責め自殺や事件被害をきっかけとして『うつ』になる事案（第2次災害）も発生している。

コラム

韓国の昔話に牛泥棒の話がある。泥棒が捕まった際の言い訳として、『この牛が、待遇の悪い牧場から出してくれと哀願したのでいやいやながら外へ出してやったもので、牛を盗むつもりはなかった』と。

中国を含め多くの国では、結果の責任の所在を他者に求める傾向が強いようだ（他者原因責任の『思考的文化特質』）。

自宅前の路上から自転車を盗んでも、路上に放置されたものだから取っても悪くない。さらに空港、駅等公共空間では、足元に置いた荷物を盗む行為（置き引き）も、管理していない持ち主の方が悪いと。

近年、日本でも『他者原因責任の思考回路』の文化変容が起きており、各所でトラブルが発生している。ネット社会がこの傾向を一層悪化させている。

3-2-3 データと記録化

認証指標5は、「傷害が発生する頻度と原因を継続的に記録する仕組みを持っていること」を、同指標6は、「予防活動の取り組みのプロセス、効果を評価・測定する仕組みを持っていること」をそれぞれ要求している。経験則ではなく社会現象の「科学的管理」である。これには、各種データ解析や疫学的知見が必要となるが、日本ではまだこの考え方が浸透していないようだ。例えば、検証には、正式には、統計学上の「検定」が必要となるが、SC行政関係者にその専門家が不足している。

安全対策の「記録」と「検証」は、人が変わっても、そのコミュニティがどのような道筋で安全の向上を図ってきたかの証人である。台湾のSC視察で、台湾では特に、記録を重視しているとの説明を聞いたが、改めて、その言葉の重みに気付く。

（続く）